

叙事詩の語り手について

大久保 健 治

古典学文献学の問題として知られているものに、ホメロス問題と言われているものがあるが、これは広く文学一般に係わる問題であって、専門分野に限定される問題ではない。そこで問われている問題、ホメロス作と伝えられる二つの叙事詩、『イリアス』あるいは『オデュッセイア』は、何を語るのかということは、いかに語るのかという問題に置き換えられるが、それは形式に纏わる問題であって、問題はその形式をいかに捉えるのかという事に尽きるからである。つまり事は文学とは何かを問う事にほかならない。私はこの問題をとく鍵は、語り手にあると考え、その点に絞り結論めいたものに近づくことができた。本論はその報告を内容とするものである。従来、ホメロスの語り手は、ホメロスの名でもって伝えられてきた伝説を巧みに纏めて伝達するものというように、その機能は極く単純に捉えられてきた。その為、現代における素朴な口承叙事詩の語り手の場合と、比較対照するような研究がなされているが、ホメロスの語り手の機能はさほど単純ではないというのが、私の考えである。それは二重の機能を併せ持ち、両者が相互媒介する所にホメロスの語り手の機能は見いだされるように思われる。

ホメロスにおける語り手の機能には二つの側面があり、両者は密接に関連するものであり、両者は相互に依存しあっている。一方を欠くなら他方はいない。出来事を伝達するという従来考えられてきた機能は、その一つに当たる。これは言わば地上的な視点にたって、物語を語るという、人間中心的な機能と言える。それにたいしてもう一つの機能は、超越的なものであって、天上から地上を眺め、地上の出来事をそれを越えた視点で捉えるものである。語り手はそのため、自らの意図を実現するためには、自らが設定した主題に従い、その主題の枠組みに従い物語を語る。二つの機能は相反するものである。超越的な機能は、自らの為に発揮されることはなく、専ら人間の世界に向けられた視線をとおして、つまり人間中心的な物語をとおしてのみ発揮される。他方、人間中心的な物語は、超越的な主題を表現するための手段として語られる。しかし語られているのは、人間界の出来事にすぎない。物語の何処にも、超越的なものの姿は見いだされない。そこでは神々もまた登場人物としては、人間と何ら変わることはない。超越的なものは、英雄と神々との交渉をとおして表現されるという点で、神々と人間とは登場人物としては質的に区別されることはない。こうした関係を統

一するのが、語り手であり、そのため語り手の機能を捉えることは容易ではなく、複眼的な視点が要求されるのである。

超越的な視点

つまり天上的な視点から物語の世界を眺めるなら、叙事詩の世界は別の一面を露にする。とりわけその場合注目されるのが、叙事詩を構成する歌という単位である。二つの叙事詩は両者共に、二十四巻（歌）構成であるが、従来巻は単に長い物語を適当な長さに区切る外的な境界線と考えられ、特に注意が払われることはなかった。しかしホメロスでは、巻自体と物語の内容とは密接に関連しており、それが叙事詩の本質を成すように思われる。二十四の巻はそれぞれが独自の特性を持ち、巻を区切る境界線はその特性の変化を示す記号のような役割を果たしているのである。巻は二十四であるが、こうした特性からするなら、その種類は十二種類である。それぞれの巻が持つその特性は、それぞれの巻ごとに特殊なイメージをとおして発揮されている。特殊なイメージは強調されるかのように、それぞれの巻における物語はこれらのイメージを軸として展開されているのである。それはあたかも音楽における主題のように、形を変え、異なる背景のなかで、出現を繰り返し、多様なイメージ相互の間に類似性が認められることになる。巻の特殊性は、こうした物語の中心としてのイメージ相互の間の類似性をとおして、その巻を特徴付けるものとして出現するのである。イメージそのものは言葉によって捉える事は出来ない。しかしイメージ相互の間における類似性の場合、言葉に置き換えることは、かならずしも不可能なことではない。ホメロスの叙事詩においては、十二の主題からなる主題群が、それ自体として同一なものとして、しかもその全体は同一の順序を持つものとして登場してくることが確認される。叙事詩の物語の世界自体は偶然的なものであり、混沌としているものの、こうした主題から眺めるなら、つまり天上的な視点に立って眺めるなら、そこには一つの秩序が認められることとなる。これが私の結論であるが、以下においてはこうした語り手の視点と物語の世界との関連を、具体的に見ていくことにしたいと思う。

ゲートとホメロス問題

私が所謂ホメロス問題に関心を抱いた切っ掛けは、ゲートである。ゲートにとり、ホメロスは彼の文学の模範であり、彼が終生研究し、大きな影響をうけた作家であることは良く知られている。ホメロス問題は、ホメロスのテキストに疑念を提出した古典文献学者、F. A. ヴォルフに始まる。私達が現在、目にして読むことができる二つの叙事詩、『イリアス』と『オデュッセイア』のテキストは、おそくとも西暦前六世紀頃に確定されたものであると考えられている。アテナイの僭主ペイシストラテスはアテナイの守護神パレス・アテネのために四年に一回、大祭を催し、その祭りの中心行事として、ホメロスの叙事詩を朗読することを定めた。そのため当時ギリシア各地に流布していた、各種のホメロス作と伝えられている伝承

を集め、朗読用のテキストを作成させたと言われている。これは伝承にすぎないものの、概ね承認されていることであり、定説といってよいであろう。しかしその際に作成されたテキストがその儘の形で今日まで伝えられてきたのか、それとも後世、別人の手が加えられたものであるのか、あるいはそうであるとするなら、その原型となったホメロスの手になる部分はどの部分なのか、という問題が持ち上がってきた。以後この点をめぐり論争が繰り返され、今日にいたるまで決着はつけられていないが、これが所謂ホメロス問題である。ヴォルフは1795年に発表した『ホメロス序説』において、テキストを分析し、そこに多くの矛盾点があることを指摘し、テキストに対して疑問を提出したのである。ヴォルフはゲーテの友人であったが、こうした見解に対してゲーテはすこぶる懐疑的であり、むしろ否定的であった。

「文学の分野では、破壊的な批評は、それほど大した害毒を流すようなことはないのだ。ヴォルフはホメロスを破壊してしまったが、その詩に危害を加えることはできなかった。というのも、この詩は、朝には身がずたずたにさけながら、昼にはまた五体を満足にそろえて食卓につくあのヴァルハラ英雄達のような奇跡的な力を備えているからなのだ。」(1821年2月1日)〈引用は『岩波文庫版』による。〉

問題は論理的な一貫性と物語としての一貫性の区別である。ヴォルフの見解によるなら、論理的な齟齬があることは、そのまま文学的な一貫性の否定に繋がる。そこからテキストは一貫したものではなく、複数の作者の手になるものであるという結論を導き出す。他方ゲーテの主張は文学的一貫性は論理的な一貫性とは異なる。論理的な一貫性なくしては、物語の伝達は不可能である。しかしそれは手段にすぎず、文学的な一貫性は論理的な一貫性を利用して表現される。論理的な一貫性の欠如は、むしろ文学に取り当然なことであるという事に尽きる。私の目からするなら、こうしたゲーテの見解はむしろ当然すぎるものであって、十分納得が行くものであるが、古典文献学の専門家の見解は別である。名にし負うゲーテの意見であるため、一応敬意を評して参考とされているものの、それはあくまでも形だけのものであって、専門家はそうした見解は、文学鑑賞的なものとして一蹴してしまうのである。しかもその意見を見てみると、文学的見解は研究にとって参考にならないばかりでなく、邪魔になると言わんばかりである。しかし対象は文学であり研究論文ではない。ホメロスの作品は文学作品として取り扱わなければならない。そこでは文字をとおして語られている事ばかりでなく、それを手段として表現されているもの、つまり直接語られず、間接的に表現されているものについてもまた、捉えることが求められているのである。しかしゲーテにしても、論理的な部分とそれを手段として表現されているものとの関係については、語っているわけではない。それはとりわけ至難なことであり、文学の本質に係わる問題である。ゲーテの場合、それは彼の文学の秘密を語ることでもある。自らの文学の秘密を語ることは、作品を自ら解説することにより、その生命を危険に曝しかねない。彼はあるいはその為にホメロスの作品の秘密に触れなかったのかもしれない。そんなふうにも考えられるのである。

叙事詩の主題

近代以後の文学観にとって、作品の主題は一つとするのが常識である。ホメロスの叙事詩の場合は二十四の巻それぞれに主題があり、全体として十二種類の主題が二度繰り返されると述べた。またその主題は超越的なものであり、直接語られている訳ではなく、物語をとおして間接的に表現されているに過ぎないとも述べた。こうした主題に纏わる私の考え方は、常識に反するため、奇異な感じをあたえるかも知れないが、以下においてそれはどのようなものなのか、すこし詳細に説明を試みてみることにしたい。しかし紙面に限りがあるためここでは二つの叙事詩のうち、『オデュッセイア』のみを取り上げ、その二十四の巻について、その主題と物語あるいは主題と結びつくイメージとの関係を見ていくことにする。『イリアス』に関しては、同じことが当てはまるが、それについては機会を改め、論じるつもりである。

まず主題を知るための手掛かりとなるものとして、類似したイメージが繰り返し出現してくるということがある。二十四の巻それぞれにおいてこれは認められることであるが、十二の主題は二つの巻において更に繰り返し登場する。ここでは第十九巻と第七巻を例として、二つの巻でどの様に同じ主題が繰り返されているのかを見ていくことにしたい。まず取り上げるのは第十九巻である。

『オデュッセイア』における物語は、その内容から二つの部分に分けられる。前半部分では、主人公であるオデュッセウスが、トロイア戦争終結後、トロイアから故国イタケ島に帰還するまでの10年間における冒険談が、主として回想風に語られる。そこでは合わせてその間故郷で成人した息子テレマコスが、父親の消息を求めて旅立つことと、旅先での模様もまた語られている。後半部分で語られているのは、帰国を果たしたオデュッセウスが、留守を守る妻に求婚すると称して彼の家に居座り、乱暴狼藉を働いてきた求婚者を退治し、夫婦が再会を果たすまでの経過である。第十九歌はこうした後半部分をなす巻であり、乞食に変装したオデュッセウスが、相手が何者であるのか知らないでいる妻と再会する模様が語られている。これは一方的な再会場面であり、乞食姿のオデュッセウスは20年振りの対面でありながらも、なぜか己の身元を隠しとおして、妻に対しては正体を明かそうとしない。それどころか危うく正体が暴露しかけると、威嚇までしてその正体を隠し通すのである。それはなぜなのか。この巻は古くから謎として問題視されてきた巻であるが、そのうち正体を暴露されかかったオデュッセウスとその足を洗う乳母エウリュクレイアをめぐるくだりは、「足洗い」の場として知られている。謎めいた場であるというのである。

謎とはこうである。20年の歳月を経て漸く帰国を果たしたオデュッセウスは、みすぼらしい乞食姿で、その帰国を待ち望む妻の前に姿を現す。何故乞食姿か。それは留守宅に住みつくと求婚者たちに、彼と知られたなら、その身に危険が及ぶためである。オデュッセウスの守護神パラス・アテネはそれを防ぐべく、オデュッセウスに直接、邸へ戻らず、先ず乞食に姿を変えて、彼のかつての奴隷の小屋を訪れること、その上でその姿のまま自宅を訪れ、誰に対してもその正体を隠すように助言し、彼はその助言に従ったのである。余所者の乞食とし

て邸に戻ったオデュッセウスは、乞食として物乞いをするが、自分はオデュッセウスの旧知であることを告げる。そこで妻ペネロペイアは乞食の口から、夫の消息を聞きたいと思い、部屋に呼びつけるが、乞食は直ぐにその部屋を訪れず、夜まで待つよう頼む。やがて対面の時がやって来る。読者はそこで、長年帰国を待った妻と長い旅を終えてようやく妻と対面を果たす夫婦の感激の場면을期待する。しかしことはそのような形では進行することはない。対面は行われるものの、それは飽くまでも見知らぬ乞食と邸を守る妻との間における、月並みな対面場面にすぎない。妻を前にしたオデュッセウスは身元を明かさず、偽りの身の上話を語り、その上、第三者としてオデュッセウスと対面した際のオデュッセウスの姿を伝える。しかし妻はその手の話は信じない。あまりにも頻繁に過去において、その種の話によって騙され続けてきたからである。しかし念のために妻は、乞食の男が対面したと称する際における、夫の身なりについて問いただしてみる。乞食は克明にその際の衣服を描写してみせる。乞食としてのオデュッセウスは自分の身なりを報告するわけであるから、嘘偽りの有るはずはない。乞食の語る衣装は、妻が夫の出発の際に、自らの手で着せかけたものにほかならない。乞食はその上、夫の帰国が間近であると伝えるが、妻は話が本当なら、衣服を相手に与えることを約束して、この話は打ち切られ、妻は女中に乞食の足を洗ってやるよう命ずる。しかも足を洗う女中についてオデュッセウスは、注文をつけ彼のかつての乳母がその役を引き受ける。乳母は相手の足の傷跡から、相手が館の主人オデュッセウスその人であることを発見する。その喜びのあまり、女中は近くにいる女主人に、その発見を伝えようとするが、乞食はその口を塞ぎ、威嚇の言葉で教えてはならないと命ずる。かくて、二人の対面の機会は奪われる。代わりに語られるのが、オデュッセウスの足の傷跡の由来である。読者の期待は完全に裏切られ、その上、無味乾燥な傷の由来話まで聞かされる羽目となる。下手くそな語り口である。天才ホメロスがそのような語り口をするはずはない。それはホメロスとは別の、能力の劣る人間が書き加えたものにすぎない。そう主張する人間があらわれても不思議ではない。かくて議論が開始され、その議論はいまだ決着をみていない。しかし主題からみるなら、こうした物語の展開は不思議ではない。作者は物語としての効果を犠牲にして、ここでは主題の為にこうした物語を用意したものと思われる。

主題としての「両親」「財産」「再発見される富」

巻と結びつく主題は一つではない。それは複数の物からなり、厳密にいうなら主題というよりは主題群とよぶべきかも知れないが、ここでは便宜上、ただ主題と呼ぶこととする。

第一の主題は「両親」である。この主題は母親あるいは父親をしめすイメージとして示される。オデュッセウスの足を洗う女中エウリュクレイアは、子供の頃のオデュッセウスの世話をした乳母である。言わば彼にとり、母親とも言える存在なのである。母親としての乳母を指名するオデュッセウス、それは主題「両親」を強調するためにほかならない。続く話においても、親を強調するイメージが繰り返し現れてくる。エウリュクレイアは足を洗いに掛

かるとすぐ、足の傷痕に気づく。エウリュクレイアは足の傷痕から、乞食がオデュッセウスであることを知ると直ぐその発見の事実を、傍に居る彼女の女主人に知らせようとするが、オデュッセウスは驚く女中の口を抑え、なにも語らぬよう威嚇する。そのため女中はそのまま足を洗い続けるが、語り手はそこから傷がなぜ出来たのか、その由来を語り始める。それは長い話であり、それが第十九巻の後半部分をなすものとなる。

傷痕をめぐる話は、オデュッセウスの誕生の時に逆上る。オデュッセウスの母親がオデュッセウスを生むと直ぐ、はるか遠く離れたパルナッソスから母親の父親が娘の元を訪れてくる。母親の父親はオデュッセウスにとり祖父に当たる。しかしここではなぜか祖父と呼ばれず、母親の父と形容され、それをとおして主題としての「両親」が指示される。

第二の主題「財産」 母親の父親はオデュッセウスがいつかパルナッソスを訪れるなら、自分の「財産」の一部を与えることを約束する。第二の主題「財産」がそこに認められるが、この財産が何であるかは語られることはない。それは財産であるということだけで十分なのである。成人するとオデュッセウスは約束の財産を受け取りに、わざわざパルナッソスへ旅立つ。

第三の主題「再発見される富」 財産は口約束された財産であって、それは約束されたにすぎないものの、既に与えられている富である。パルナッソスに到着したオデュッセウスはそこで、その約束されたものの、未だ目にしていないものとしての富を与えられる、つまり再発見するのである。オデュッセウスは誘われるままに、訪問先の人々とともに、猪狩に参加し、猪を発見しその後をおうが、猪は木陰に隠れてしまう。猪は獲物、つまり富である。それはすでに発見されたもの、発見された富に当たる。しかしその猪は再び姿を現す。再び現れた猪は、オデュッセウスを襲い、その牙でオデュッセウスを突く。傷痕は再発見された富としての猪によって付けられたのである。傷痕は「再発見される富」を示す記号とうけとることも出来るのである。さらにまたエウリュクレイアにとり、オデュッセウスは良く知る「富」に相当する存在であり、長らく行方知れずになっていた存在である。その帰還は一日千秋の思いで待ち続けられてきた。そうした彼女は足洗いにおいて、傷痕を発見する。「再発見する富」を経験するのである。なぜかつて乳母であった彼女が足洗いの役に選ばれたのか、それは主題の上から、十分説明が付けられるのである。

主題は繰り返されるイメージ、類似したイメージをとおして示される。しかもそれはある特定の場限定して、類似したものとして現れてくる。第十九巻ではすでに取り上げた一連の主題が、その全体にわたり繰り返し現れてくるのが確認される。こうした箇所の中でもとりわけ乞食としてのオデュッセウスが語る、オデュッセウスとの対面の件、とりわけその際のオデュッセウスの服装を巡る詳細な描写が目を引き。

「勇武のオデュッセウス王は、紫色に染めた二重折りの毛の上着をつけ、これには、玻璃先を納める二本の鞞のある、黄金のブローチがついておりました。その前部に施した細工は誠に見事なもので、一頭の犬が身をもがく斑ら模様の子鹿をじっと見詰めながら前脚でしっか

と抑えています。……」

オデュッセウスは過去の自分の衣装を回想し、その回想に耳を傾けているペネロペイアは、彼が語る衣服は、オデュッセウスの出発のおり、自分が納戸から取り出し、自らの手で彼に着せかけたものであることを発見する。それは家の「財産」であり、既知の富である。その富を彼女は、乞食の回想談において再発見するのである。しかもこの衣装における犬と子鹿を巡るくだりには、「足洗い」の場における猪を彷彿させるところすら見られるのである。

繰り返される主題、「第七歌」の場合

十二の主題は、物語の前半部分と後半部分とにおいて、それぞれ登場し、都合二度出現を繰り返す。第十九歌に出現する「両親」を代表とする一連の主題は、前半部分の第七歌において登場してくる主題である。この巻は物語の展開は主題を提示するイメージとの結びつきがうまくいっている箇所であり、あまり問題とされることがない巻と言える。10年に及ぶ海上遍歴の最後に、オデュッセウスはパイエクス人の島にたどり着き、その島の王の好意により帰国を果たすこととなるが、第七巻ではその前史に当たる部分であって、彼がその王の娘ナウシカの指示により、その島の王の館に赴き、王と王妃に対面した上で、帰国のための援助を懇願する模様が語られている。

語り手は巻の冒頭において、王の館の豪華さに驚くオデュッセウスの目をとおして、王の「財産」がいかに大きなものであるかを、逐一詳細に語る。王はここでは同時にナウシカの父親でもある。オデュッセウスは王宮内の王の居間へと向かうが、途中誰一人として、その姿に気づかない。女神アテネがオデュッセウスの身体を霧でもって覆い、人目につかぬようたくらんだためである。居間には王と王妃、それに島の長老たちがいるが、その前に出るとオデュッセウスの身体を包んでいた霧が突然晴れる。いきなり出現した見知らぬ男、その場に居合わせた人々は皆その突然の出現に驚く。これは主題「再発見される富」を示す物語の展開の前段階とも言える部分に当たる。オデュッセウスはその場にいた王と王妃とに、帰国の援助を求めるが、その願は意外なまでに簡単に受け入れられ、話の中心は王と王妃の娘ナウシカをめぐる展開される。

突然晴れた霧、そこから出現した見知らぬ男、これは突然姿をあらわして傷を負わせた猪の再来であるが、それに最も驚くのは王妃である。王妃は見知らぬ男の身体を包む衣服を目にする。それはナウシカが洗濯の為に持参した衣服であり、ナウシカが裸のオデュッセウスに与えたものであった。家の「財産」であり富である。なぜ家の「財産」をこの見知らぬ男は身につけているのか。王妃は富としての衣服を「再発見」するのである。王妃はナウシカの母である。この再発見をきっかけとして、王と王妃は王でも王妃でもなく、一人の父親あるいは母親として行動することとなる。両親にとって気掛かりなのは、衣服そのものよりも、娘がこの客人にたいしてとった態度である。パイエクス人は人をもてなす術を重んずる民である。娘は客人を案内もせず、客一人をここへ越させたのか。娘の振る舞いに落ち度があっ

たのではあるまいか。そうした王の懸念に対して、オデュッセウスはそれを打ち消し、その上ナウシカの振る舞いを弁護する。ナウシカは結婚適齢期の娘である。そのような娘が異国の男の道案内を努めるなら、人々の噂になりかねない。そのため道を教えると、王女は道の途中で彼と別れ、一人、先に帰ったのであり、それは娘として当然な振る舞いである。オデュッセウスの言葉は王を喜ばせる。娘は王にとり、大切な宝、つまり富である。その真価は既に十分承知していた。それゆえ今この見知らぬ男が保証してくれたのである。つまり王は父として、娘について「再発見する富」を経験するわけである。

オデュッセウスの弁護はさらに、王をしてオデュッセウスという人間の価値を発見する機縁ともなる。霧に包まれて出現した男、その発見に加えて、王はオデュッセウスの真価という富を更に発見するのである。「再発見」オデュッセウスの価値の再発見は、富の発見であること、それを示すのが続く王の言葉における富の提供の話である。内面的な価値に対して、王は具体的な「財産」の話を持ち出す。

「そなたのような立派な男が——それに考えもわしと同じそなたが、この地に留まってわしの娘を妻にし、わしの婿と呼ばれるようになったらどんなによかろう。もしそなたが進んでこの地に留まってくれるのであれば、屋敷も財産も与えるであろうが、……」

娘に見合う男としてのオデュッセウス、この場における王は一人の父親「両親」にすぎないのである。しかしオデュッセウスはその話を聞き流す。彼にとっては島に留まることなど思いもかけぬことであって、彼の内には帰国のことしかない。そのためオデュッセウスは父親の話を聞き流し、ナウシカを巡る話は、途中で断ち切られ、この巻の話そのものもまたそのまま打ち切られることとなる。後に残されるのは中途半端な物語という印象である。読者の物語に対する不満、その点においてこの巻の物語もまた第十九巻とどこか似ている。つまり主題のために、物語そのものが犠牲にされているということである。

十二の主題群（前半部分・第一歌から第十二歌）

十二の主題は『オデュッセイア』の前半部分と後半部分とにおいて、二度同じ順序にしたがってそれぞれを構成する十二の巻に配分され、それぞれの巻における物語は、それを中心として展開される。主題はどのような形で物語の展開に組み込まれているのか、以下においてその概要を見ていくことにしたい。すでに見たように厳密に言うなら、それぞれの主題はむしろ主題群と言うほうが正しく、複数のものの組み合わせをなすが、ここではその中の代表的なもののみを取り上げることとする。なお物語中主題と関連する部分については、便宜上下線を施しておいた。表題はそれぞれの歌の内容を主題に沿って要約するために、便宜的に添えたものである。

①第一歌、神々の集会（主題「国と家」）

オリュポス山での神々の集会におけるアテネの建言により、カリュプソの島で足留めされているオデュッセウスを帰国させることが決定される。カリュプソの許へはヘルメイアス

を、イタケ島へはアテネが派遣される。イタケ島へ赴いたアテネは、テレマコスを激励し、暴慢な求婚者たちと対決すべく奮起させる。

②第二歌、協力者アテネ（主題「友人」）

テレマコスは集会を催して求婚者たちの悪行を訴え、旅立ちへの協力を求めるものの、好意的な反応はあるものの、成果はえられない。しかし女神アテネがオデュッセウスの友人メントルに扮して協力し、船と水夫とを用意したため、出発の準備は整う。アテネは友人として旅に同道する。

③第三歌、敵の家、ネストルの家とその帰国（主題「敵」「裏切」）

テレマコス一行がピュロスに着くと、ネストル一族がオデュッセウスの敵海神ポセイダオンに生贄を献じているところに出会う。女神とテレマコスは敵である神に祈願することを要求され、それに従ったため、自らの立場を裏切る。帰国の際の争いと裏切を語るネストル。しかしオデュッセウスの消息は知らず、メネラオスをスパルタに訪問するようすすめる。

④第四歌、性格と外見。変身の神（主題「性格」「身体的特徴」）

メネラオスとヘレネ夫妻は、訪問客を一見しただけで、その身体的な特徴から豪胆な性格のオデュッセウスの息子であることを知る。メネラオスはプロテウス、身体的特徴をかえることを性格とする変身の神から聴いた、オデュッセウスの消息を語る。

⑤第五歌、オデュッセウスの希望、カリュプソの絶望（主題「希望」）

オデュッセウスを夫にという希望を抱くカリュプソは、神々の決定を知ると、絶望するものの、オデュッセウスの帰国への希望実現のため、筏作りに協力。詳細に語られる筏作りの過程と海上での遭難の様子は、絶望に彩られた希望増大の過程。遭難した彼を助ける鷗レウコテが希望のシンボルであるヴェールを投げ与えたため、希望を得たオデュッセウスは努力を重ね、島にたどり着き、森に入り眠る。

⑥第六歌、女神としてのナウシカ（主題「女神」）

女神さながらに美しい王女ナウシカは女神アテネの勧めに従い、女神さながらに美しい女中たちとともに海岸へと赴く。女神さながらに戯れる娘たちの声で目覚めたオデュッセウスは、王女に近づき相手を女神として称え、救いを求めるが、その際衣服を与えられる。

⑦第七歌、両親としての王と王妃、再発見される衣服（主題「両親」）省略

⑧第八歌、王の三人の子供たち、アプロディテの愛（主題「子供」「アプロディテ」）

宴席で、オデュッセウスは島の王の三人の息子たちの芸を鑑賞し、歌人が歌うアプロディテの姦通の話聴く。歌人はトロイア戦争の歌を歌い、それを聴くとオデュッセウスは不覚にも落涙したため、王はオデュッセウスが誰の子供であることを問いただす。

⑨第九歌、怪力キュクロプス対非力オデュッセウス（主題「健康」「肉体的欠陥」）

オデュッセウスが語る漂流談。巨人キュクロプスは、怪力、健康のシンボル、隻眼、肉体的欠陥を特徴とし、健康食、ミルク、チーズの生産者。非力なオデュッセウスは、肉体的欠陥を知力で補い、巨人に打ち勝つ。阿片愛好者、健康の敵の島での冒険などが語られる。

⑩第十歌、妻としてのキルケ、夫としてのオデュッセウス（主題「結婚」）

漂流談の続き。子供同士を結婚させる風の神とその妻の話に続き、魔法で男を豚に変える女神キルケの話が語られる。キルケと結婚関係を結ぶ事でオデュッセウスは、その魔法を征服するが、仮の妻キルケは、妻として夫オデュッセウスの帰国に協力する。妻は助言を得るため冥府行きを勧める。峰のような巨大な王と王妃夫妻の島での冒険。

⑪第十一歌、冥府の旅、様々な死者たち（主題「死」）

冥府でオデュッセウスは多くの死者と出会い、死をめぐる様々な経緯を聞く。

⑫第十二歌、太陽神の牛、牛飼としての女神たち（主題「太陽神」「社会的階級」）

社会的階級毎に異なる運命。オデュッセウスは歌う魔女セイレンの難を、階級毎に役割分担を定めて免れる。帆柱に身体を縛らせる主人、耳栓をして糧を漕ぐ部下。太陽神の牛の島においては、部下は主人の命を踏みにじり、禁断の牛を食らい太陽神の怒りをかい、全員死に至る。一人、カリュプソの島に着く主人オデュッセウス。

十二の主題（第十三歌から二十四歌）

後半部分では、帰国を果たしたオデュッセウスが息子テレマコスと協力して、敵である求婚者を討ち果たし、その後で妻と再会を果たす経緯が、十二の主題毎に区切られた、十二の物語として語られる。ここで主題が登場する順序は、前半部分の場合と同じである。つまり一連の主題は一度登場を繰り返すと、再度最初に戻り登場を繰り返す訳である。ここから十二の主題の配列は、円環的なものであることが判明する。

⑬第十三歌、帰国（イタケ島）とスケリエ島のその後（主題「国と家」）

イタケ島へ到着するものの、居場所が判らないオデュッセウス、その前にあらわれたアテネは彼に、彼の国と家とを詳細に紹介する。目の前に出現するイタケの光景。送り届けた側のパイエクス人は、国と家への到着寸前、沖合で怒ったポセイダオンによって船を石に変えられ、国から外へ出る道を塞がれる。

⑭第十四歌、善意の権化、豚飼エウマイオス（主題「友人」）

オデュッセウスはアテネの指示に従い、乞食に変身して、正体を明かさぬまま、忠実な豚飼エウマイオスの小屋を訪ね親切にもてなされる。乞食の友としてのエウマイオス。

⑮第十五歌、テレマコスの忘恩と敵の家への帰還（主題「敵」「裏切」）

帰国の途中、テレマコスはネレウスの国に立ち寄るものの、好意を裏切り、挨拶もせず乗船する。その際、裏切の犠牲者で、故国を敵の家とする亡命者を同乗させる。到着後、彼もまた敵である求婚者が待つ我が家を避けて、豚飼の小屋を訪れる。

⑯第十六歌、オデュッセウスの変身と大胆さ（主題「性格」「身体的特徴」）

オデュッセウスは息子を前にして、乞食としての身体的特徴をかなぐり捨て、英雄としての本来の姿を示す。大胆な求婚者征伐の計画、それをとおして示される英雄的性格。

⑰第十七歌 絶望の終わり、高まる期待と愛犬の死（主題「希望」）

テレマコスの帰館と乞食の登場をとおして、館のうちに主人帰国への希望が徐々に高まっていく。オデュッセウスと対面した愛犬の死をとおして、絶望の死が語られる。

⑥第十八歌、女神のパロディ、イロスと女神のごとき女主人（主題「女神」）

伝令の神、美しい虹の女神イリスのもじりとしてのイロスは、使い走りの乞食で醜悪の権化。オデュッセウスに喧嘩を吹きかけ、打ち据えられる。求婚者の前に姿を現すペネロペイア、求婚者たちはその女神に等しい、中年女性の魅力に魅せられる。

⑦第十九歌、足洗いとオデュッセウスの衣服（主題「両親」「再発見される富」）省略

⑧第二十歌、息子としてのテレマコス（主題「子供」）

求婚者征伐を控えた父親としてのオデュッセウスと子供テレマコスとの不安な一夜。

⑨第二十一歌、強力を持ち主と非力な求婚者たち（主題「健康」「肉体的欠陥」）

強弓への挑戦。求婚者、テレマコスは失敗して非力、つまり肉体的欠陥を示し、オデュッセウスは非力に見えながらも、成功し強力を、つまり、健康を示す。

⑩第二十二歌、乞食の正体、夫としてのオデュッセウス（主題「結婚」）

オデュッセウスは求婚者を前にしてペネロペイアの夫であると名乗り、有夫の女への結婚申し込みの不当を詰り、罰として求婚者全員を殺害する。

⑪第二十三歌、凍れる心、生きたベットの謎（主題「死」）

事情を知らなかったペネロペイアは、夫の死からの帰還を認めないため、オデュッセウスはその心を死んだ心と見なして嘆く。しかしペネロペイアは企みにより、オデュッセウスが二人しか知らない夫婦のベットの秘密を知るところを発見。生きたオリーブの幹を切断したかのように、あたかも死んだものであるように語ると、驚くオデュッセウス。それを境にペネロペイアの心は融ける。つまり死から復活を遂げる。

⑫第二十四歌、太陽神ゼウス、身分の取り違え（主題「太陽神」「社会的階級」）

ここではゼウスは、木々に実をならせる季節を送る神、太陽神。そうした実がなる父親の農園へと、求婚者の一族の襲撃を避けて、オデュッセウス一行は赴く。求婚者一族との開戦寸前、そのゼウスによる働きかけをとおして和解する。和解は、太陽神としてのゼウスが恵んでくれた実りにほかならない。オデュッセウスは土地持ちである父親を、奴隷として取り違えて見せる、社会的階級を取り間違えてみせる場面もある。

幾何学的な主題表現

語り手による主題のイメージ化からは、一定の意図の存在が認められる。繰り返し出現する主題としてのイメージはそれぞれが相互にコントラストをなすように構成されており、そこから精密な計算の跡が窺えるからである。一つの巻の内部において、あるいは個々の巻を越えて、複数の同じ主題を持つ二つの巻相互の間にも、鮮やかな対比的な表現が見いだされるが、それは幾何学的とも呼びうるほど、緻密である。『オデュッセイア』が語る世界は混沌としているが、しかしそこから与えられる印象は逆に明快である。それはこうした構成の結

果であるように思われる。以下においてそれがどれほどまで徹底しているのか、二つの巻を取り上げて見ていくことにしたい。取り上げるのは、第一の歌と第十三の歌であり、この二巻は共通の主題として、「国と家」を与えられている。この二巻の主題は多様である。つまりその主題は「国と家」以外に、少なくとも三つのものが認められる。「第三者との関係」（総括）、「勇気と弱気」、「地位」であるが、「国と家」は、これらの主題群を代表するものにすぎない。これらの主題は、あたかも半径が異なる同心円のように、相互に重なり合い、それによってこの巻の枠組みをなしており、語り手はその枠組みを強調する形で物語を展開する。つまりこれらの主題はいずれも多様なイメージとして現れ、それを軸として物語は展開されていくのである。以下、これらの主題とイメージあるいはイメージ相互の関係について簡単に説明しておきたい。

①「国と家」 神々の国と家としてのオリュンポス山。神々はオリュンポス山に集まり、オデュッセウスの帰国を決定する。人間の国と家、イタケのオデュッセウスの留守宅。その決定により、女神アテネはイタケ島におけるオデュッセウスの留守宅へと赴き、その帰国のための準備を整える。女神はその息子テレマコスをして精神的に自立させ、父親の消息を求めて旅立つよう勧める。

②「第三者との関係」（総括） 物語の主人公オデュッセウスの紹介。物語は主人公オデュッセウスの海上遍歴の最後の数週間を語るが、その紹介は遍歴の最後の時期からその過去10年間を振り返りつつ、総括する形でなされる。オデュッセウスの海上遍歴は、同時に彼と彼がその途中訪れた町の人々との関係に置き換えられて、総括される。さらに彼と彼の部下との関係もまたそれに重ね合わされており、両者の関係は一体的にではなく、切り離し区別する形で概観されているのが特徴的である。つまりこれらの人々との関係は、ここでは「第三者との関係」として捉えられているのである。

「ムーサよ、わたくしにかの男の物語をして下され、トロイエの聖なる城を屠った後、ここかしこと流浪の旅に明け暮れた、かの機略縦横なる男の物語を。多くの民の町を見、またその人々の心情を識った。己が命を守り、僚友たちの帰国を念じつつ海上をさまよひ、あまたの苦悩をその胸中に味わったが、必死の願いも空しく、僚友たちを救うことはできなかった。彼らは自らの非道な行為によって亡んだのであったが、……」

神々における「第三者との関係」 オデュッセウスの帰国の遅延は、海の神ポセイダオンの怒りが原因である。オデュッセウスは旅の途中で出会った、海神の息子で一つ目のキュクロプスと戦い、策略でその眼を潰して危機を脱する。海神はそのことを怒り、ゼウスに訴えるが、ゼウスはその怒りをおそれるあまり、オデュッセウスを帰国させるとしても、それを遅延させ、その上彼一人のみ帰国させることを約束する。それから10年近くを経て、ポセイダオンはアイティオペイアへと旅立つ。そこに住む人々のささげものを受け取るためである。それを利用して、オデュッセウスに好意を持つ女神アテネは、父親にオデュッセウス帰国の約束の実現を迫る。かくて物語は進行することになるが、語り手はその間の事情を神々の父

ゼウスとその娘アテネとの会話をとおして、総括的に示すのである。その際ゼウスはまず第三者として、人間を取り上げ、その例としてアガ멤ノンを暗殺したその妻クリュタイムネストラの愛人アイギストスを取り上げる。人間は愚かで、神の警告を無視するものかという事の例とされるのであるが、その際のアイギストスは神と人間との関係を「第三者との関係」として総括的に示す例にほかならない。ゼウスが続いて取り上げるのがオデュッセウスであるが、オデュッセウスはここではこうした神と関係において、つまり第三者として先ず紹介されるのである。

人間界における「第三者との関係」。オデュッセウスの不在と帰国の遅延は、その留守宅に不幸をもたらす。近隣の領主たちはオデュッセウスの妻ペネロペイアに求婚すると称し、その返事が貰えるまではと、四年前から留守宅に居座り、家の食べ物で連日宴会を催し、乱暴狼藉を尽くしている。策を弄して返事を引き延ばしてきたペネロペイアはこうした求婚者の振る舞いによって苦しめられ、またその息子はそうした事態にたいして、求婚者と母親に対して不満を抱き、こうした経緯を問われるまま、訪れてきた父親の古い友人にたいして、つまり女神アテネに対して、過去を総括する形で報告する。

③「勇気と弱気」 テレマコスの変身。テレマコスの女神に対する報告は、女神をして怒らせる。一つには求婚者の振る舞いは言語道断である。しかしそうした事態を前にして、何の手も打たず、ただ泣き言を並べているテレマコスはひ弱で不甲斐ない。それは女神を苛立たせ、女神は強い言葉を用いてテレマコスを叱咤激励する。するとテレマコスのうちに忽ちにして勇気が沸き起こり、彼はもはやなにごとにも恐れない強い人間へと変身を遂げる。女神は島の人びとを集めて集会を開き、その席上で求婚者に対して家からの退去を要求するよう助言する。またあわせて父親の消息を求めて旅立つよう助言する。それは勇気を必要とする行為である。旅立ちには求婚者の妨害すら予想される。妨害を排して旅立つこと、それには強い精神力が不可欠である。しかし今やテレマコスは何事も恐れない。

テレマコスの変身の結果をまず示すのが、テレマコスと母親との関係における変化である。宴会の席上、歌人がトロイアにおける英雄、オデュッセウスの活躍を歌うと、ペネロペイアは悲しいからと歌の中止を求める。するとここで息子テレマコスは母親にとって意外な態度を示す。口答えするのみならず、命令を下すのである。我慢できないのなら、自分の部屋に戻り、女中と共に糸紡ぎの仕事をするようにというのである。命令される立場から、命令する立場への変化、それはテレマコスの精神的な成熟、自立をしめす証拠である。母親は驚くものの、すごすごとその命令に従いその場を去らざるをえなくなる。続いてテレマコスの変身は、求婚者との関係における変化として示される。テレマコスは求婚者にたいして家からの退去を要求するので、求婚者は彼らと対等の口をきくばかりか、命令まで下すテレマコスに驚く。しかもその上、テレマコスは彼らの一人と王位をめぐる対話まで始め、堂々と自説を展開するのである。そうした新しいテレマコスは求婚者たちにとり、脅威になる。

ゼウスの変節。弱気から強気への転換、それを神々のケースにおいて捉えたのが、女神ア

テネとの対話におけるゼウスの二股膏藥的な姿勢である。ゼウスはオデュッセウスの帰国を約束しながら、ポセイダオンの怒りを恐れるあまり、その実現を引き延ばしにしてきた。しかし娘神アテネは今やその実現を父神に迫る。するとこれまで弱腰であったゼウスは忽ちその要求を受け入れて、オデュッセウスの帰国に同意する。つまり強気に転ずるのである。しかしこの強気はポセイダオンが留守であることによって初めて可能になったものにすぎず、いつまたその逆に転ずるか知れたものでない。ここに見られるのは、弱気と強気との間で動揺するゼウスにほかならないのである。

④「地位」 イタケの王位 テレマコスと求婚者の一人との対話において、島の領主の地位が話題として取り上げられると、求婚者エウリュマコスは、国の領主という「地位」が世襲でないことを強調する。テレマコスには王位を継がせないということである。するとそれにたいしてテレマコスは、国の領主であることは世襲でなく、それにふさわしい人間の物であることを認める。実力で獲得されるものであることを認めること、そこには実力で自分はその地位を獲得してみせるという自信の程が窺えるのである。

神々と人間の父としてのゼウス。神々の父としてのゼウスの「地位」もまた、不動のものではない。海神ポセイダオンの怒りを恐れて約束の履行を遅らせるゼウス、娘の神によって不履行を責められて直ぐさま決定を覆すゼウス、ここにみられるのは、神々の父という「地位」にふさわしくないゼウスである。ゼウスの「地位」と其れに見合う実力は、絶えず他の神々によって問われているのである。

第十三歌の場合

第一巻における主題表現と、この歌における主題表現とのあいだには、明確なコントラストが認められる。つまり二つの巻の物語を比較して見ると、その表現に対照的な形態が与えられていることである。第一巻においてオデュッセウスは海上遍歴中であって、物語の舞台に登場することなく、単にその存在が語り手により間接的に語られているにすぎなかった。しかし第十三巻ではその不在であったオデュッセウスが今や帰国を果たし、物語の舞台の中央に登場し、女神とやり取りする姿が示されている。同じことは神々についても当てはまる。第一巻で旅行中であつたオデュッセウスの敵ポセイダオンは、今や帰国して無事帰国を果たしたオデュッセウスを見付け、しかも多くの贈り物すら与えられていることを目にして、ゼウスにたいして約束違反を言い立て、復讐を迫る場面が克明に語られているのである。コントラストはその件においても認められるが、ここでもまた主題ごとに、そして人間と神々という区別に従って、それがどのようなコントラストであるのか見ていくことにする。ここでまず語られるのはオデュッセウスがイタケ島へ到着する模様である。

①「国と家」 人間の国と家、イタケ島。帰国の途中船中で寝てしまったオデュッセウスは、目を覚ますと、見知らぬ島の浜に一人置き去りにされていることに気づく。送ってくれたパイェクス人の姿はなく、辺り一面に深い霧が立ちこめている。そのため帰国を果たしたもの

の、当の本人にはその事実は判らない。異国にいるものと思い込んでいるオデュッセウスの前で霧が晴れ、その光景が徐々に姿をあらわす。しかしそれは彼の目には見知らぬ国の光景としてしか見えない。ここはどこなのか。戸惑う彼の前に女神が島の娘に変装してあらわれ、問われるままにここがイタケという国であり、それがいかなる国であるのかその国を詳細に説明して聞かせる。それは国と家としてのイタケ島の見事な表現であり、主題表現であると言える。

神々の国と家。オデュッセウスの帰還は、もう一つの国にとり不幸な結果をもたらす。ポセイダオンは自分の留守中に、パイェクス人がオデュッセウスを帰国させた事実を知って激怒する。この神をなによりも怒らせたのは、それを送り届けたのが彼の子孫に当たるパイェクス人であったということである。これでは神々の長老としての面子は台無しである。そこで早速海神はゼウスのもとを訪れ、直談判に及ぶ。自分の名誉の回復の為に、パイェクス人を厳罰に処すよう求めるのである。海神の怒りを恐れるあまり、ゼウスはその要求を、一部ではあるものの受け入れ、罰を下す。オデュッセウスを送り届けた一行が島の沖合に差しかけたとき、ゼウスは罰として、その船を石に変えもはや使い物にならなくしてしまう。かくてパイェクス人は、遭難者をその故国へ送り返すという、長年にわたるその使命を断たれ、外に開かれた「国と家」は、交通手段を失い、孤立することを余儀なくされるのである。かくて海神の名誉が回復される訳であるが、その経緯がここでは詳細に物語られることとなる。不在であった海神が詳細に語られること、そこに鮮やかなコントラストが認められるのである。

②「第三者との関係」(総括) 人間における第三者。その一。パイェクス人は遭難者をその故国へ送り届けることを、誉れある使命とする民であった。そのための重要な交通手段である船が石に変えられる様を目の当たりにして王は、かつて父が語っていた予言を思い起こし、自らの民の使命の終結したことを知る。それはいつかポセイダオンの怒りに触れて、その使命が終わるときが来るという予言である。その予言を思い出し、船の石への変化を目にすることにより、彼は過去から現在にいたる自らの民の運命を、つまり遭難者という「第三者との関係」を総括するのである。

その二。過去から現在に至る「第三者との関係」を、現在から未来にいたるものとして先取りの総括して語るのが、この巻の冒頭において語られるオデュッセウスとアテネとの対話である。オデュッセウスは無謀にも夥しい数の敵、求婚者に対して一人で真っ向勝負することを告げる。無謀な計画である。女神はそのためオデュッセウスを窘め、策略を用いることを勧める。乞食に変装して豚飼の小屋を訪れること、その上であらためて身をやつたまま館を訪問し、敵を欺くこと、テレマコス以外は身内であろうと、正体を明かさないとといったことである。

神々と第三者との関係。そして付け加えていうなら、この二つの主題表現は、同時に神々の第三者との関係の総括として示されていることを指摘しておきたい。ポセイダオンと第三

者としての人間、敵としてのオデュッセウスとの関係は、パイェクス人に罰を与えることで終わることとなる。もはやこの両者の関係は語られることはない。あるいは女神アテネと求婚者との関係は、未来のこととして先取りされる形で語られるのである。

③「強気と弱気」 オデュッセウスの場合。オデュッセウスが最初に念頭に置いていたのは多数の敵に、一人で立ち向かうことであった。それは英雄オデュッセウスの勇気を語るものにほかならない。それに対して女神は策を用いるよう助言する。策は弱気の現れであり、弱気を武器とすることは結果として、勇気を示すことになる。オデュッセウスが従うのは後者であり、それは第一の歌における弱気のテレマコスの強気への変身と、逆の経過をたどるものである。つまりその表現はコントラストをなす。

ゼウスの場合。帰国したポセイダオンは、ゼウスに懲罰を迫ると、ゼウスはその要求に屈して罰を与えることとなる。ゼウスは強気の結果としてオデュッセウスの帰国を実現したが、その償いを弱気でもって果たすわけである。第一の歌においては弱気のままオデュッセウスの帰国を遅延させてきたゼウスは、女神アテネの要求に従って強気に転じて、その帰国を実現させた。ここにまたもう一つ、コントラストをなす表現が見られるのである。

④「地位」 イタケ島の王の地位。第一歌において、帰国の遅延が原因で問題とされていたイタケの島の王位は、王としてのオデュッセウス帰国をとおして、回復される。残されている課題は求婚者を打ち倒すことにより、それを確かなものとすることである。かくて求婚者討伐の為の計画が練られることとなる。

ゼウスの神々の父としての「地位」。ポセイダオンの威嚇により、オデュッセウスの帰国を延期してその地位を穢していたゼウスも、第十三巻においてオデュッセウスを帰国させることで、その面目を回復する。他方、ゼウスを凌ぐ威厳を持っていた海神の方は、オデュッセウスの帰国により、しかも彼の子孫の手によって帰国が果たされたことにより、その神々の長老としての誉れを、つまり「地位」を傷つけられる。たしかにポセイダオンはゼウスに罰を与えさせることにより、それに相応しい名誉を取り戻す。しかし彼が要求したことは、パイェクス人の島を山によって取り囲み、外との交通を断つことであった。しかしゼウスは単に船を石に変えたにすぎない。ポセイダオンの要求は部分的に受け入れられたに過ぎず、その回復は部分的なものにすぎない。第一巻におけるポセイダオンの名誉は、一旦失われると、もはや完全には回復されることはないのである。

第七歌と第十九歌の場合

ここで取り上げた例は十二の主題の中の一つであり、取り上げた巻はそれに関連する二巻にすぎない。しかしここで確認した同一主題をコントラストをなす形で表現するということは、残りの主題十一とそれと結びつく二十二の巻すべてにおいて確認されるのである。因みにここで蛇足ながら、先に取り上げた主題「両親」「財産」「再発見される富」という主題と、それを主題とする二つの巻について簡単に触れておく。

第七歌。ここでは話題となる衣服は、直接オデュッセウスの身を纏うものとして、王妃によって直接的に再発見される。続く王と王妃とオデュッセウスの対話は、問いと応答をとおして一連の主題を直接的に示すものであった。

第十九歌。しかし一連の主題は、第十九歌では、同じ衣服も、オデュッセウスの回想談の一部として語られているにすぎない。ここでは「両親」もまた語り手の回想における母あるいは母の父親として、あるいは乳母エウリュクレイアというように、悉くそのイメージはヴェールをとおして間接的に示されているに留まる。

計り知れないものと顕現する神

二十四の物語の枠組みとしての、あるいはそれぞれの物語の中心として主題は、物語の登場人物には計り知れないもの、つまり運命に近いものといえる。その物語においては登場人物としての神々もまた人間も、その主題としての運命に支配され、その運命に従って考え、行動することを余儀なくされる。叙事詩の語り手はオデュッセウスの帰国談を、それぞれこうした定められた枠を用意し、それにみずからも拘束されつつ、しかもその枠組みを強調する形で語る。そこには神々と人間、英雄との交渉をあざやかなイメージをとおして伝達するという機能とともに、もう一つの機能、その物語をとおし計り知れないものとして運命を表現するという、もう一つ別の機能が確認されるのである。登場人物を越える運命は、二十四の物語の枠としてのみ見いだされる。しかしそれを支配するのはこうした枠組みであり、物語はその枠組み、つまり登場人物にとり計り知れないものを表現する為の、手段にほかならない。しかもその手段は物語を仲立ちとしてのみ表現可能なものであって、直接語ることは不可能なものである。なぜなら計り知れないものとしての運命は、言葉で直接語りえないがゆえに計り知れないからである。それは言葉によって語られるイメージをとおしてのみ、表現され、その存在が知られるのである。

曰く言いがたいもの。ギリシアの神々は顕現する神々と言われている。あざやかなイメージをとおして出現するが、直接的には捉えられない存在が、ギリシアの神である。ホメロスの語り手は、輪郭の鮮やかなイメージをとおして、それを越えるものを表現する。ここでは主題は直接的に語られることなく、イメージを媒介として、つまりそれに言わば覆い隠される形で表現されるために、主題そのものは正体不明なものとして、すなわち曰く言いがたいものとして表現されることとなる。それは言葉でもっては捉えられないものである。語りえないものはかくて、鮮やかなイメージをとおして表現されることとなるが、それを可能にしているのが語り手の二重の機能にほかならない。ホメロスの叙事詩の朗読はアテナイの守護神パラス・アテネの祭祀の中心をなす行事であったといわれているが、こうした語り手の機能をとおして見た時、アテネの祭祀に参加した朗読の聞き手たちは、その朗読をとおして目前に神が、曰く言いがたいものとして顕現するのを目にしたものと思われる。それは直接的に語られる神々の姿と結びつき、語りえないものであって同時にあざやかな形象を備えた

ものとして経験される。祭りの参加者は顕現するものをおして神を経験し、その曰く言いがたいものに向けて祈願する。これがパラス・アテネの祭祀の中心として、叙事詩が朗読された理由であったと、私は想像しているが、語る事が不可能なものを言葉をおして表現するという難問を解決したのが、語り手の二つの機能にほかならない。そこにまた文学の本質をみる思いがするのである。(未完)

註 ホメロスからの引用は、松平千秋訳『岩波文庫版』を用いた。